【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（中学校用）

都道府県名	鳥取県

Ⅰ　学校の概要（平成 15 年 4 月現在）

学校名	鹿野町立鹿野中学校					
学年	１年	２年	３年	特殊学級	計	教員数
学級数	2	2	2	1	7	１７
生徒数	５７	５０	４７	1	１５５	

Ⅱ　研究の概要

１．　研究主題

確かな学力の定着を求めて

２．　研究内容と方法

（１）　実施学年・教科

1　全学年・全教科で研究実践を行う。 ・職員の意識調査の結果、自分の指導法に自信が持てないという結果がでた。指導法の追究が生徒の確かな学力の定着に最も重要と考えた。 2　習熟度学級編成による少人数指導を 3 年生の数学と英語（年間）、2 年生の数学（３学期）、1 年生の数学（2 学期）で実施した。 ・生徒の理解に差がでやすい教科、学年である。

（２）　年次ごとの計画

平成15年度	○　テーマ　　自信と熱意を持って学ぶ生徒の育成 ○　研究の見通し（仮説） 　本校の生徒は学習の意義を考えず、学習を苦行ととらえて臨んでいる生徒が多い。また、一人ひとりの生徒に目を向けたとき、そこには学力保障が十分になされていない生徒の存在があった。最低限の学力が保障され、生徒がいつも楽しく意欲的に学習に臨める姿こそ今の鹿野中学校には必要と考える。そんな姿が実現されたとき、生徒の一人ひとりの学習への自信と熱意が取り戻されると考え、このテーマを設定した。 ○　研究の内容・方法 　教師の授業改善に重点をおき、教師一人ひとりが互いに刺激し合い、啓発できるように研修の場を多く設定する。教師一人ひとりの指導力向上策を図る。 　また、「評価」と「学習意欲」を柱に実践を行う。外部評価（生徒・保護者による授業評価）、自己評価、評価規準、学習動機の追究を行う。

平成16年度	○　テーマ　　自信と熱意に満ちた指導法の追究 ○　研究の見通し 　生徒が自信と熱意を取り戻し学校が変わるためには、教師が自信と熱意を持って教育活動を展開する必要がある。「自分自身の指導に自信がもてない」という事実と指導力を高めたいという全職員の熱意を大切にしながら研修の場を充実させる。このことが生徒の学力の定着の一番の要因と考え、本テーマを設定した。 ○研究の内容・方法 　日々の授業の充実を図るため、あらゆる評価を取り入れる。常に反省と修正を加えながら実践を進める。特に、限られた時間の中で最大の効果をあげることができる評価規準の追究を行う。また、小中学校のつながりのある教育を意識し、その連携に努める。

（３）　研究推進体制

1　研究職員会（共通理解と実践の評価修正）
2　研究推進委員会（企画立案・連絡調整）
3　研究部会　①教育課程研究部（効果的な教育課程の編成と指導体制の研究）
②学習指導研究部（授業研究・指導改善の具体的方法の追究）
③評価研究部（評価規準・外部評価の追究）
④記録・広報研究部（開かれた学校と説明責任の追究）
4　教科部会（学力の定着と指導改善に向けた具体的な取組み）
　一つの実践を行うとき、学習指導と評価と記録・広報の３つの部会が順次機能していく。

Ⅲ　平成15年度の研究の成果及び今後の課題

１．　研究の成果

【職員アンケート】5月と12月の比較
「教材研究ができている」肯定的な回答　２５％⇒３６％
「十分な教科指導ができる」肯定的な回答　２５％⇒７３％
【生徒アンケート】現中学3年生の昨年2年生からの推移
「勉強が好きだ」肯定的な回答　１９．６％⇒２４．４％
「先生が丁寧に教えてくれるので、学習がよくわかる」
肯定的な回答　５０．０％⇒５５．６％

1　教科の壁、小規模校であることを理由になかなか開かれなかった職員集団が、お互いの教育実践を交換し、刺激しあう集団に変わりつつある。自分の指導法が独善的になっているのではという不安が解消され、また、見えなかった自分の長所・短所が客観的に見えるようになり、そのことが指導法改善への意欲につながった。また、生徒の変容も少しずつ表れてきた。

２　今回は研究実践を学校組織としての取組みと教科別（個人）研究の２つに分けて行った。教科別の研究では「評価」と「学習意欲」を自らの切実な問題ととらえ、創意工夫をしながら主体的な研究が進められた。なかでも「自己評価」の研究実践が多くあった。生徒のメタ認知の育成と形成的評価の追究がその中心といえる。生徒が持続的な自己向上意欲を喚起していく粘り強い取組みが見られた。

３　より多くの目で鹿野中学校の教育活動を点検していただく取組みが十分とはいえないが、ある程度実践できた。特に授業評価についてはわずかではあるが前進できた。保護者・地域・生徒・職員様々の方の外部評価が授業改善につながったものと思われる。

２・今後の課題

１　評価規準

関心・意欲といった情意的な観点での評価は知識・理解・技能といったものにくらべて教師の独善的なものになりかねない。その理由は目標として設定しにくく、かつ目標達成がはっきりと確認されにくいことによる。評価規準はそんな独りよがりの評価に陥らないためのひとつのよりどころとなる。評価規準を作るためにはそれぞれの内容におけるそれぞれの観点での目標分析が重要と考える。今年度その評価規準についての具体的な話し合いがもてず、あいまいに終わってしまったことは反省すべき点である。しかし、評価規準を作ることが目的ではなく、それを日々の授業実践に生かすことが重要であると考える。限られた時間の中で最大の効果をあげることが教育の課題であり、本校の課題でもある。

２　小中連携

連携のあり方が不十分であった。今回の研究は共同研究ということではなく、それぞれがテーマを設定して実践することになった。準備が整っていた小学校の研究計画を参考に中学校の研究が後を追う形で始まった。研究の内容を共有できることは、お互いにとってプラスとなる。しかし、研究の教科が数学と国語というふうに限定されると、対応する中学校の職員はおのずと限られてくる。太く深く実践を共有することが困難であった。

また、お互いの教育現場をより深く理解することがいかに重要かということを痛感した。生徒を送り出す小学校と迎え入れる中学校が９年間という期間で違いを認めつつも、つながりのある教育を行うという視点を今後は明確にし実践すべきである。お互いの実践交流をさらに充実させていきたい。

Ⅳ　学力把握のための学校としての取組み

【学習アンケート調査】（年間１回　１２月実施）
学習実態を把握し、研究の成果と課題を明確にする。

【学習動機調査】（年間１回　１０月実施）
学習動機の主な要因を把握し、個々の生徒の適切な学習の動機付けに反映させる。

【標準学力テスト】（年間１回　４月実施）
５教科の学力実態の把握と年次比較による課題の明確化と指導法の追究を行う。

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

・近隣の小中学校への授業研究会の公開（２回）
・地域、保護者への説明会
・学校だよりを通して学校・職員の実践、生徒の実態を紹介（４回）
・郵便局に学校だよりを掲示してもらい情報の公開に努めた（４回）
・フロンティア実施校の研究会への参加と情報交換（３回）
・ホームページの開設（来年度予定）

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　■　15 年度からの新規校　　□　14 年度からの継続校

【学校規模】　□　3 学級以下　　□　４～６学級
■　７～９学級　　□　１０～１２学級
□　１３～１５学級　　□　１６学級以上

【指導体制】　■　少人数指導　　□　Ｔ・Ｔによる指導
□　その他

【研究教科】　■　国語　■　社会　■　数学　■　理科
■　外国語　■　音楽　■　美術　■　技術・家庭
■　保健体育　■　その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　■　有　　□　無